

## 「文化勲章」

副会長 重永 憲明

学校に来ていながら途中で授業をさぼる子が居た。身体が弱そうには見えない、メガネをかけていて真面目そうだが身体はむしろ大きく、休み時間には窓の外でキャッチボールなどをして遊んでいる。そんなときはボールのように真っ白な歯を見せて何かから解放されているように見えた。この子も学校が嫌いなのか家が厳しいのかどちらかなど考えたりした。

みんなからあだ名で呼ばれている先生が居た。熊のような巨体を揺すって国語を教えておられた。とても良く依怙鼻屑をする先生で、漢字のテストで全問正解すると名前を呼んでは「将来はきっと博士だ」と言ってクラス中に紹介された。

ある日良くさぼる子に先生が話しかけられていた。「そうか、残念だったな。今度はがんばれよ」という風な言葉だったと思う、驚いた。良くさぼる子に先生がやさしく声をかけられていることに意外な感じがしたのだろう。その子が親元から離れて一人で上京して将棋を指していると言う話を聞いたのはそれから間もなくのことだった。授業を休むのは公式戦の対局のためだ。

僕も多少の心得はあったので手合わせをしてもらったことがある。格上の人と指す場合は、相手が飛車または角を落してくれるいわゆる「飛車落ち・角落ち」。次に飛車・角の二枚を落とす「二枚落ち」。普通はこれで何とかなるのだが彼の場合は違った。飛車・角に加えて香車・桂馬まで落とす。金・銀と歩しかない相手陣地はいかにも頼りな

い、すぐにでも陥落しそうである。これなら、と勢い込んで攻めて行くが敵の壁は厚い、追われるように虎の子の長距離砲を捕られて万事休す。防戦一方のままわずか二十分で投了だ。その頃初段にもなっていないかっただと思うがこの強さ。暫く彼からいただいた雑誌などで勉強もしてみたがレベルは遙か上だった。とても相手にならないと諦め、その代わりでもないが駒を扱う指さばきだけは真似をさせてもらった。親指と小指でつまみ上げたかと思うと、今度は人差し指と中指に持ち替え二本の指を使ってぱちんと音を立てて駒を打ち込む時の手裁きは実に華麗だ。彼のマニキュアを塗ったようなきれいな爪とまっすぐな長い指先を覚えている。

プロの世界とはこういうものかと思った。こうなると俄然彼に対する見方が変わった。一見ひ弱そうに見えるが、実は背中に竜の入れ墨でも背負っているのではないかと錯覚するくらい芯の強さを感じた。

学校を卒業してからも彼の成績が気になり、本屋で将棋の雑誌を立ち読みしては彼の段位と対戦成績をチェックすることが永く続いた。一度も降格することなくどんどん上ってゆく、まるで蒼穹に舞い上がる竜のように。そしてとうとう頂点まで登り詰めてしまった。

今校長室に彼の書が掛かっている。

国語の先生もお元気だ。

平成二十一年五月六日